

の時間」の否定として「女(母)の時間」を導入するには、日本的主体(なるものがあれば)は、彼女の主張するところの「くでない」という言語ならざる「母なる時間、空間」(沈黙や行間、気やムードなど)に支配されているようにみえるからである。

—ともあれ、フェミニズム第二世代の向こうに想定

誕生会の一年間

山口 陽子

この三月までの一年間は一歳児クラス十五名を担当していました。いちばん小さい二月生まれの子は

される第三世代が太古の母なる「巨大な時間」を特権化することなく、それと第一世代が同一化しようとした「直線的時間」の両者を引き受けることができるならば、新たな女だけでない男の解放の展望も開ける可能性はある。今後のクリステヴァの理論展開に注目したい。

(聖徳学園短期大学非常勤講師)



一歳一か月から二歳一か月までの一年間。四月生まれの大きい子は一歳十一か月から二歳十一か月の一

年間というように月齢差のある子どもたちです。

今回、一歳児の担任という立場で「時間」について考える機会を与えられ、一歳児が時間をどのようにとらえているのか、ふだんの保育の中では意識的に深くは考えていなかったのですが、この際、思いおこしてみる必要があるなと思いました。それと同時に、一歳児クラスの一年間という「時の流れ」は保育者の側から見れば「一年間でこの子どもたちがこんなふうになってきた」と子どもの成長と保育の積み重ねがどうだったのかと、ふり返る機会にもなりました。

そのひとつに誕生会があります。三、四、五歳児クラスは一堂に会して月一回の誕生会があります。

○、一、二歳児の各クラスではクラスごとに月下句のおやつの時間に誕生会をします。月下句というのは、その月生まれの子たちが、誕生日を各家庭で祝ってもらった後のほうが、「保育園でもみんなでお祝いするんだ」ということが少しでも理解しやす

いかなという配慮です。内容は各クラスによってちがいますが、一歳児クラスではふだんのおやつを食べる形にテーブルを並べて（コの字型）、まわりにみんながすわります。誕生月の子を前に出して、「♪たんたんたんたんたんじょうび、きょうは○○ちゃんたんじょうび。○○ちゃんおめでとう」とお祝いの歌をみんなで歌います。それからプレゼントの手作りナップザックと、写真のはつである誕生日カードを手渡して、みんなにも見せてあげます。「○○ちゃん二歳になったんやねえ」と指でチョコキの形を見せて見せてあげると、みんなも指で同じようにして「二歳」「チョコキや」とやっています。それから保育母の出し物をします。ペープサートの月あり、パネルシアターの月あり、絵本を大きな紙しぼりに作りかえたものをしたり、季節の歌を歌ったりしてから、お祝いメニューのおやつ（ふだんのおやつよりもちょっと工夫と手間をかけたもの）の配膳となります。

一歳児にとって誕生日というものが、自分の生まれた日であるとか、一年に一回あるものなどということは、もちろんまるでわかってはいません。けれども、ほぼ毎月、同じパターンで誕生日をしているうちに、二歳の子が二人になり、三人になると、ふえてくるわけで、「誕生日ってこんなことするんだ」とわかってくるようです。おもしろいことに、二歳になったばかりの当の本人にはいまひとつ、自分の誕生日なんだということの自覚はないのです。ですから、みんなの前に出された時も、なにがなんやらわけがわからないという顔つきで、他のクラスの保母も見に来ていたり、いつもとちょっとちがう雰囲気になかば緊張していたりするものです。だから、四月、五月の誕生日は何か保母だけ楽しんでいるみたいですが。

月が進んで、誕生日を終えた二歳の子がふえてくると、「自分もこのまえば誕生日カードをもらったなあ、おめでとうと言ってもらったなあ」などと思

出すようで、わかったような顔をするようになるのは不思議です。そのわかったようなというのが自己主張たけなわの一歳児クラスらしくてゆかいなのですが、六、七、八月頃の誕生日ではプレゼントのナップザックが出されると、色ちがいのものもあるけれどがらが同じなので、すでにもらった子は自分のものだと思うようで「○○ちゃんのー」と主張して泣き出すことも。誕生日カードも同じで、てっきり自分のものと思ってしまうのですが、「ほら、これは△△ちゃんだよ。△△ちゃんの写真がはってあるね。○○ちゃんのはおうちにしまってるよ」と△△ちゃんの写真を見せるとやっと納得。指で「チョキを出す二歳のサインも、「自分こそが二歳なんだ」と他の子が二歳のサインを出しているのが気に入らなくて大バニック。保母の「○○ちゃんも二歳。△△ちゃんも二歳。××ちゃんも二歳やなあ」でひとりずつ認めてもらってニコリ顔になる子どもたちです。誕生日の歌も、歌い終わると「きょうは○○

ちゃんの誕生日」に自分の名前をあてはめてほしくて、誕生日とは無関係にみんな「△△ちゃんも」「××ちゃんも」とどんどんりくエスト。もちろん保母は、気前よくりくエストに答えてあげるわけですが。

さすがに二月の誕生会では子どもたちから「○○ちゃんちがう。きょうはりゆうちゃんのたんじょうびやでー」「りゆうちゃんとみほちゃんのたんじょうびやなあ」などの声が出ます。「あんなあ、きょう、まさとのとうちゃんのたんじょうびやなあ」と四月生まれのまさとくん。ほんとかなあと、保母は一瞬思ったのですが、お迎えの時、お母さんに聞

くと、その通りとのこと。どうやら誕生日はそれぞれの子に順番にやってくる、ということが、みんなが二歳を過ぎるころにはわかってくるようです。

月一回のささやかなとりくみですが、毎月回を重ねるうちに、「みんな（誕生会があるということ）は）同じなんだなあ」という共感も生まれるし、「自分はチョコキなんだ（二歳なんだ）」という自己意識も持つようになり、「時間の認識」というようなものではないかもしれないけれど、二歳の子どもなりにその基礎になるものが育ってくるのだなあ、とあらためてわかったような気がしました。

（社会福祉法人京都保育センター・くりのみ保育園）

飛翔する過去の時間

